

# 市史しぼれ話

106

## 榑海地区

来春には、合併による新市が誕生する予定で、市の歴史のなかで節目を迎えます。地域の名称は、そのまま継承されることと思いますが、名称とその由来を中心に地区の歴史を紹介することにします。

榑海（ちんかい）は、一八八九年（明治二十二年）に榑村と春海村の合併で生まれ、両村名から一字ずつとり村名となりました。榑村は、中世からの集落である天神（てんじん）五正部（ごしょうぶ）が続いて台地の縁辺部に宿（しゆく）の集落が形成されました。仲荒久（なかあ

らく）、向荒久（むかいあらく）は、榑新田の干拓後にできた集落で、「アラク」とは新たに開拓された所をいいます。

籠部田（中央地区）地先から飯塚・内山地区への農道を通ると、五正部集落やそれに面した匝瑳地区生尾・宮本区の七入野（なないりの・ななよりの）があり、歴史的な集落の景観を感じさせます。七入野は台地の先端が入りこんでおり、ひもなどをよつたかたちから生まれた地名です。この辺りは村と村の境界をめぐって、一六三三年（寛永十年）にいったん幕府の判断が出されたにもかかわらず、一六四九年

（慶安二年）から七年間にわたり争論となりました。この道を通るときにそうした争いの歴史があったことを思い起こしてみてもどうでしょうか。

春海村は、一六七〇年（寛文十年）の榑湖（つばきのうみ）の干拓後、一六七四年（延宝二年）から新田が売り出され、それを求めた農民が集落を作り、はじめは「榑村下」とよばれていたものが、一六九六年（元禄九年）に「春海村」と名付けられました。春海の由来は、村名を付けるにあたってめでたい地名としたのでしょう。榑湖の干拓によって十八の新村が誕生し、市域では米持村（よねもち・豊和地区）と春海村が新田村でした。

同村でもっとも早く集落ができたのは瀬戸谷（せとや）で、新田が売り出されると同時に農民が屋敷をかまえたのでしよう。瀬戸谷、千葉島（せんぱじま）、水神下（すいじんした）は一六九五年の記録に見られ、次いで寄島（よじま）、沖（おき）に集落ができました。

水神社は、榑新田一八か村の新田三社の一社といわれ、この干拓事業の成功を祈願したのでしよう。中世の古集落と三〇〇年以降の新集落が混在しているのが榑海地区といえます。

（生涯学習課）

農民が豊作を祈った水神社

